



説教要旨「異邦人への福音」

ローマの信徒への手紙Ⅰ 15章 4～13節

「すべての道はローマに通じる」という格言がありますが、聖書の時代のローマはその言葉通り、ヨーロッパ各地から人が集まる世界最大の国際都市でした。もちろんユダヤ人もたくさん住んでおり、ローマの教会はユダヤ人キリスト者を中心として建てられました。しかし紀元49年に、当時のローマ皇帝クラウディウスの発布したユダヤ人追放令によって、ローマの教会は、残された異邦人キリスト者の教会になったのです。事態がさらにややこしくなるのはその5年後、クラウディウスが死んで追放令が解除されたのです。そこで戻ってきたユダヤ人キリスト者と、異邦人キリスト者の対立が深まっていたローマの教会に、使徒パウロが宛てた手紙がこのローマの信徒への手紙です。

ユダヤ人も異邦人も共に、キリストにおいて神に受け入れられ、愛され、罪を赦していただき、神の民とされている。それがパウロの伝えるキリストの福音、喜びの知らせです。ユダヤ教の礼拝において、ユダヤ人と異邦人は明確に区別されていました。エルサレム神殿には“異邦人の庭”と呼ばれる場所までしか異邦人は立ち入れず、ユダヤ人と異邦人は別々の場所で礼拝をささげていたのです。ユダヤ人と異邦人の間に平和な関係が築かれ、一つの群れとなるなどということは、旧約聖書の時代には考えられないことだったのです。けれども、イエス・キリストによる救いの知らせ(=福音)が、それまで敵対関係にあったユダヤ人と異邦人とを、神の恵みの中で一つに結び合わせ、ユダヤ人と異邦人が一緒になって神を賛美することを可能にしたのです。

人間の思い、意見、自己主張がぶつかり合ってなかなか一致できず、対立してしまうわたしたちの間に、神が、キリストを信じる信仰において喜びと平和を満たして下さるということを、パウロは見つめています。相応しくないわたしをキリストが受け入れてくださったように、自分とは意見が違い、対立してしまうことのあるあの人この人も、同じようにキリストによって受け入れられ、神の民に加えられているのです。